

ある樺太出身者の引揚げ後の生活

— 幼少期の引揚げ体験と自身の経験の振り返りについて —

尾曲香織・石子智康

Key Words

樺太 (Sakhalin)、恵須取 (Ulegorsk)、引揚者 (Returnee)、再移住 (Re-migration)、引揚げ後の生活 (Post-repatriation life)

1 はじめに

本稿は、当館の「樺太記憶継承事業」の一環として開始した聞き取り調査の内容を報告するものである。「樺太記憶継承事業」は、令和3（2021）年に解散した全国樺太連盟（以下樺連と表記）から北海道への要望である樺太の記憶の継承について、同連盟の寄付金を基金として令和2（2020）年から行われている事業である。令和16（2024）年まで15箇年をかけ、ご寄贈いただいた資料の整理、関連する資料の収集や聞き取り等の調査研究の実施、資料整理や調査研究成果の利活用等を通して樺太の記憶継承に取り組むものである。令和6（2024）年3月には文書や図書資料の目録⁽¹⁾を発行し、令和7（2025）年3月には写真や図書、生活資料等の目録を発行する予定で作業を進めている。この作業と並行し、樺太引揚者及びその家族を対象とした、樺太での生活や引揚げ後の生活等に関する聞き取り調査も開始したところである。

樺太での生活や、引揚げ際の苦難は、これまで当事者自身の回想録や当事者への聞き取りを書籍として出版したり⁽²⁾、動画サイトにおいて回想談として映像化したり⁽³⁾して公開されてきた。また、樺太出身者たちの同窓会や同郷の人々で結成された団体の会誌⁽⁴⁾における回想録や、北海道内の自治体史や郷土研究会の会誌⁽⁵⁾の記事も含めれば、相当数の記録が存在しており、かつての体験を当事者たちで共有したり、もはや大多数となった戦後生まれの世代に伝える重要な資料ともなっている。ただし、これらの情報集積が進んでいないこと、こういっ

た記録が総じて樺太から引揚げるまでが対象とされ、それ以降についてはあまり言及されてこなかったという課題が残っている。

戦後の樺太引揚者の生活については、島村恭則をはじめ、徐々に研究されるようになっていく（島村 2013；洪・田口 2016；尾曲 2021など）。ただし、その数は十分とは言えず、そもそも、研究を進めるための基本的な情報、すなわち個別の事例の収集と記述、そしてその蓄積が十分とは言えない状況にある。「樺太記憶継承事業」における聞き取り調査は、個別の事例の収集、記述、蓄積とともに、対象となった個々人の体験が、引揚者を対象としたさまざまな施策や、社会状況の中でどのように位置づけられるのかといった検討も進めていく予定である。

本稿はひとまず、ある男性から聞き取った内容を紹介する。研究史の整理や今回の事例の分析については、稿を改めたい。また、聞き取り調査の際に調査者によってメモのほか、録音データ、会話を文字起こしたデータが作成される。今回の調査に作成されたこれらのものは、被調査者の語りそのものの公開のためではなく、聞き取った内容の備忘および確認を目的として作成している。そのため、現在のところ公開は予定していないが、調査年月日、被調査者、調査者等の基本情報を付して適切に保管するとともに、これらそのものも資料とするかについては、今後検討を行いたい。

なお、今回対象としたA氏は、樺連で事務を担っていた男性である。樺連解散後も、樺太に関する資料の情報提供などで連絡を取る機会があり、また自身の体験につ

尾曲香織：北海道博物館 研究部 生活文化研究グループ
石子智康：北海道博物館 研究部 歴史研究グループ

(1) 『北海道博物館資料目録』第3号

(2) 近年出版されたものに限って言えば、藤井まさ子・藤井輝備 2018『樺太 戦火逃れて』葦の会出版委員会、永井豪 2016『海馬島脱出 子もたちの敗戦記』まっ出版、工藤敏行 2017『樺太、永遠なる大地』牧歌舎など。

(3) 全国樺太連盟Youtubeチャンネル (<https://m.youtube.com/channel/UC5zm4mbScW8hFHKkFlxGTog>：最終閲覧日2025年3月11日)

(4) 札幌真岡会による『真岡』、全国樺太泊居会による『泊居会会報』、恵須取第三小学校同窓会による『開校60周年記念誌 北斗の星』など。北海道博物館に所蔵されている分については、『北海道博物館資料目録』第3号を参照されたい。

(5) 『函館市史 通説編』第4巻pp.602-606、『えべつ昭和史』pp.156-157、『かみふらの 郷土をさぐる』第6号～第8号など。

いて聞かせていただく許可を得ることができたため、聞き取り調査を実施した。本稿の2以降に記述するライフヒストリーは、令和6（2024）年5月31日に尾曲と石子が自宅を訪問した際と、12月1日にA氏が来館された際に尾曲が聞き取った内容及びA氏自身で作成した自分史をもとに記述する。A氏の自分史は、令和5（2023）年に、これまで調査してきた先祖の来歴と、それに連なる自身の経験を回想し、まとめたものである。このうち、樺太からの引揚げ体験については、A氏の母親が平成23（2011）年に語ったものをA氏が再構成してまとめている。

2 A氏のライフヒストリー

(1) プロフィール

先に記したように、本稿で紹介するのは、昭和19（1944）年に樺太の恵須取で生まれ、昭和23（1948）年に引き揚げた男性、A氏である。A氏は大正4（1915）年生まれの父と大正12（1923）年生まれの母の次男として生まれた。

父は、大正4（1915）年に樺太野田寒郡小能登呂村大字仁多須字仁多須にて、新潟県刈羽郡荒浜村（現柏崎市）から明治43（1910）年頃に移住した夫婦の四男として生まれた。十代の頃は恵須取町沼ノ端にて提灯屋を営んでいた兄⁽⁶⁾の手伝いで、安別などの町に出かけ、御用聞きや提灯の配達などを行っていた。昭和15（1940）年12月に結婚、翌年5月に入籍した。このとき王子製紙恵須取工場に勤務していた。

母は、大正12（1923）年に樺太真岡郡真岡長大字真岡字北濱町にて父と母の長女として生まれた。2歳から小学校に上がるまで、祖母のつながりで廣地村の「馬追蕎麦屋」と呼ばれる家に預けられ、その後真岡尋常小学校、真岡高等小学校に通った。昭和11（1936）年には真岡での火災の影響により廣地村へ移り、廣地高等小学校に編入、昭和14（1939）年3月に卒業した。昭和14年8月から昭和15（1940）年2月まで恵須取町南浜町にあった茶木文房具店に勤務、同年3月から12月まで樺太庁の恵須取支庁にて勤務し、結婚を機に退職している。

(2) 出生から引揚げまで

A氏が樺太で暮らしていたのは、昭和19（1944）年から昭和23（1948）年、A氏が4歳になるまでの期間である。この頃のことについては、A氏が母から聞き取っ

た内容を中心に記述する⁽⁷⁾。

昭和16（1941）年8月に、A氏の両親は、父の勤務する王子製紙恵須取工場の社宅で暮らしていた。翌年にはA氏の兄が生まれ、昭和19（1944）年にA氏が生まれた。

昭和20（1945）年8月9日に、ソビエト社会主義共和国連邦（以下ソ連と表記）との戦争状態になったことを知った一家は、翌10日の夜から集団避難を開始した。このとき父は軍に徴用されており不在だったため、母と兄、A氏の3人で避難することとなった。徒歩のほかに手段がなかったため、母は1歳のA氏を背負い、兄の手を引き、ほとんど食料も持たずに移動した。恵須取から海岸沿いに逃げ、鶴城村、婆古沼、来知志、珍内を通って久春内に至り、そこから東に樺太島を横断して真縫、白浦を通して落合町に到着した【図1】。避難を開始してから一週間以上経過していたという。この間、道路は避難する人びとで混雑しており、集団で避難した王子製紙恵須取工場の一団も途中で散り散りになってしまっていた。落合町に至るまで、日中はソ連の機銃掃射におびえ、暗くなって足下も見えない頃に、母も周囲の人々も歩いてひたすら先へと進んだ。道中、まだ攻撃が激化していない地域では、地域の人びとが炊き出しをしてくれたため、食事を取ることが出来たが、それも毎日のことではなかった。また、母は避難の合間におしめを洗濯し、乾くまで自分の体に巻き付けて歩いたという。

落合町では、王子製紙恵須取工場に勤務する親しい男性と再会でき、そのおかげか現地にあった王子製紙落合工場の宿泊施設である倶楽部会館に身を寄せることができた。この間、父は敷香から南下し、落合町までたどり着いた。そして母の知人が偶然にも父を見つけ、家族が揃った。

しかし9月中旬には、もともと暮らしていた場所に戻ることがソ連から命じられ、落合から徒歩で北上。白浦、真縫、知取、新間、内路から内恵道路にて白雲峠を越え、上恵須取、肝太から恵須取へと至った。霜の降りる10月上旬に製紙工場の社宅に戻ったが、もとの社宅の一部は既にソ連軍が使用していたため、別の社宅に移り住んだ。昭和21（1946）年には弟が生まれ、5人家族となっていた。

昭和23（1948）年に、一家は第四次引揚げ者として函館に引揚げることとなった。8月13日に出発した長運丸に乗船し、初日は真岡港内にてチフスの種痘をうけ、翌日に引揚げ申告乗船名簿、引揚げ証明書等々の申請を行っ

(6) この兄は鉄道関係の業務（おそらく樺太庁鉄道）に従事していたが、汽車入れ替えの際の事故で足を切断したため退職し、その後は提灯制作・販売業を営んでいた。提灯制作の技術は、小樽で修行をして身につけたという。

(7) A氏が樺太に関する調査を行う過程で、2011年に88歳になる母親と、樺太にいたころから親しかった友人2名を招いて自由に語り合ってもらい機会を作った。それをもとに、引揚げ体験についてA氏が再構成している。

た。そして3日目に函館港に到着した。船上でツベルクリン注射を打ったという。一日おいて5日目によく下船し、体に着いたノミなどをとるためDDTで消毒、その後税関の検査や郵便電信受付、応急援護金の支給を受け、レントゲン検査も受けた。ここでようやく入居先へとトラックで運ばれることになった。入居先は、千代ヶ岱にあった引揚者援護寮であった。入寮翌日、久しぶりに入浴をすることが出来た。

入寮は一時的なものであったが、船中でA氏の弟が麻疹に罹り下船の後隔離されたため、一家は援護寮での滞留を余儀なくされた。しかし回復せず、9月7日に亡くなった。一家は援護寮にあった掲示板に父の兄が岩内町で暮らしていることが分かるメモが貼られていることに気がつき、その情報を頼りに一家は岩内町へと移動した。岩内町に到着した後の9月13日には、亡くなった弟と入れ替わるように、四男となる弟が生まれた。9月22日に復籍したものの、そこには亡くなった三男は掲載されず、四男が三男として記された。岩内町での暮らしは長く続かず、昭和24（1949）年には母の実家を頼り、一家は新潟県西頸城郡浦本村（現糸魚川市）へと移った。父は隣の能生町の化学工場に就職したものの、親族に「体に支障が出る」と反対されて退職した。この年の12月末に、函館市にいた樺太時代の父の知人を頼り、職探しのため父は一人で渡道した。

(3) 小学生の頃（昭和25～32年）

昭和25（1950）年から27（1952）年にかけて、一家は函館市で暮らした。湯川で仮の住まいを見つけ、父は職探しを続けた。そして、北海製紙という当時現金封筒を作っていた会社に勤務することとなった。

昭和26（1951）年にA氏は湯川小学校に入学した。秋には修学旅行で大沼公園に出かけた。この頃は借家で台所のほか六畳と四畳の二間、便所は外にあったため夜は怖くていけなかったという。

函館に移る際に頼った知人が、昭和27（1952）年には江別町（現江別市）の北日本製紙工場で勤務することになったことをきっかけに、父も江別で職を探し始めた。その際、樺太にいた頃の上司に出会い、北日本製紙への就職が叶った（函館市、江別市の位置については図2のとおり）。一家は江別町の北日本製紙工場の社宅へと移り住んだ。社宅はいわゆる八軒長屋で、建物の両端に共同の水道の蛇口があった。ここから水を汲んで家まで運ぶのが子どもの仕事で、天秤棒を使ったもののふら

つくため、両手にバケツを持って運んだ。水は台所の瓶に入れていた。冬には蛇口が凍って閉口したという。ほかに、母が朝早くに製紙工場の土場にあるガンビ⁽⁸⁾を拾い集めるので、それを兄とA氏とで朝6時に工場の第三門までリヤカーを引いて受け取りに行った。受け取った後はまたリヤカーを引いて二人で社宅まで戻る、という手伝いもしていた。母は特定の会社に就職はせず、田植えや稲刈りなどのデメンに出ていた。江別で暮らすころには子どもは5人の7人家族になっており、両親が何とかやりくりして子どもを育てていた。

この頃の食事は、ちくわやかまぼこ、魚肉ソーセージなどの加工品や豆腐、油揚げ、サツマイモ、カボチャ、馬鈴薯（ジャガイモ）などが中心だった。唯一のごちそうが魚肉ソーセージ入りのカレーライスだったが、普段肉をほとんど口にすることができないため、これが最高級だった。また、運動会のお弁当には、母親の作る干瓢で巻かれた稲荷寿司がお決まりで、これも好物だった。

函館からの引越に伴い、A氏は江別第三小学校⁽⁹⁾へと転校した。湯川小学校の担任の先生のこと大好きで、別れがたかったものの「江別に行くのが嫌だったら養子に来てもいいよ」と声をかけてもらったのがとてもうれしかった。

そうはいつても、引越先先の社宅には同学年の子どものも多く住んでおり、パッチやビー玉、かくれんぼや鬼ごっこ、陣取り、竹馬、スキー、百人一首などを楽しんだ。学校では毎年学年別でのマラソン大会が開催され、2年生の時には2位、3年生では1位、4年生では2位、5・6年生の時には1位と足の速い少年だった。6年生の時には、賞状のほかに景品として小学館発行の本の付録だった『リボンの騎士』を受け取り、これが特に印象に残っている。

また、父が頼って函館・江別と移動した知人の息子とA氏も友達同士だった。その友達は6年生の時に郊外に引越していたため、5kmほどを歩き、遊びに行った。また、彼が転校した先の美原小学校⁽¹⁰⁾の運動会で行われたマラソン競技にもA氏は参加し、優勝。このときの景品が自転車のタイヤのチューブだった。来年は自転車のサドルをもらいたい、と他校の行事も楽しみにしていた。

A氏の通った江別第三小学校は、このころ校舎の増改築を度々行っており、運動会の開催場所もそれに合わせて変更された。2・3年生の時には学校の真向かいにあった広場、4年生の時には校舎の横、5・6年生の時に

(8) シラカバの皮。ガンビともいい、焚きつけに用いた（石垣 1991：102）。

(9) 江別第三小学校は、江別市内の人口増加も一因となって昭和4（1929）年に開校した。平成28（2016）年3月31日に閉校、江別小学校と統合し、平成29（2017）年4月に江別第一小学校となった。

(10) 美原小学校は、明治36（1903）年に設置された三原簡易教育所の流れを汲む江別市美原にあった小学校である。昭和61（1986）年3月に閉校、4月に篠津小学校と江北小学校と統合して北光小学校となった。

は飛鳥山野球場が会場となった。また、円形校舎が昭和31（1956）年12月に完成し、3階建てのうち1階の教室だけがすぐに使えたことから、当時6年生だったA氏は冬休み明けからこの新しい校舎で過ごした。

(4) 中学生・高校生の頃（昭和32～38年）

昭和32（1957）年、A氏は江別第三中学校へと進学した。小学生の頃と同様足が早かったことから、校内体育大会の成績も良好だったため、江別市内の中学校体育連盟陸上大会に出場することとなった。1年生の時には200m、2年生の時には400m競技に出場。3年生の時にはマラソン（3～5kmくらい）への出場を希望し、第2位となった。3年生の時の大会会場は飛鳥山競技場であり、出場直前に父親が「これを飲んで頑張れ」と、生卵一個を持って現れた。昭和34（1959）年当時、卵はまだ貴重かつ食卓にもほとんど並ぶことがなかったので、大変嬉しかったという。この結果を受け、3年生の8月には石狩管内の「中体連陸上競技大会」に出場。円山陸上競技場にて開催されたその大会で1,500m競技に出場し第2位となった。練習せずにこの結果を出せたことで自信が深まった。なお、このときに所属していたのは野球部であり、ポジションはレフトだった。

このほか、学校行事として、札幌中心部まで歩き、列車で帰ってくる耐久遠足や、函館と仙台、松島などを訪ねた修学旅行なども経験した。

昭和34年の冬、高校受験の頃には、岩内で生まれた弟の下に弟と妹が一人ずつ生まれており、幼い兄弟が泣いたり騒いだりという状況だった。父親はA氏が受験勉強に集中できるようにと、ちゃんちゃんこを着て弟や妹を背負い、散歩に出かけてくれていた。このときの受験科目は七科目に渡っており、特に音楽が苦手だった。なんとか合格し、翌春から江別高校へと通うことになった。

高校1年生の時には硬式野球部に入ったものの一週間ほどで退部、2年生の時にはどこにも所属せず、3年生の4月中旬に陸上部に入部。ひと月経たないうちにインターハイの札幌地区大会の1,500m走と1,500m障害に出場した。前者は7位、後者は優勝し、8月に函館市の千代台陸上競技場で行われた全道大会へと進んだ。ここで2位になり、全国インターハイ陸上競技大会に出場することになった。会場は大分県で、開通したばかりの関門トンネルを通ったことも印象に残っている。この当時、陸上部にはA氏しか長距離選手がおらず、駅伝をしたかったA氏は、夏休み明けから、往復20km先にある

他校の酪農機農高校まで通い、その駅伝部員と練習を行った。そして10月末に引退届を出し、陸上部生活に終止符を打った。

(5) 就職から退職まで（昭和38～平成16年）

昭和38（1963）年に、札幌市にあった百貨店「五番館」に就職した。所属は1階にあったスカーフ・ショール・傘売り場であった。5月には、いわゆる五月病になり、出勤したものの朝礼後に仕事場を無断で抜け出し、支笏湖まで出かけ、閉店間際の18時半頃に戻ってきたこともあった。

就職と同時に、短期大学にも入学した。夜間の部で、18時半に仕事を終えてから大学に通い、22時過ぎに自宅に帰る生活を2年間送った。夕食はあんパン1個で、空腹だったが、それも気にならないくらいの充実感があった。時々列車のなかで眠り込んでしまい、江別の駅で降り損ね、千歳川を渡る鉄橋を通過する際の音で目を覚まし、終点の岩見沢駅まで行ってしまうことも何度かあった。

A氏は就職活動で江別市役所も受験、合格したものの、定員の10名中5名だけが内定、ほか5名は1年以内に空きがでたら、という条件がついた。1年後の昭和39（1964）年、空きが出たことと、陸上競技大会に出場するのに百貨店よりは休みが取れるのではないかと、という理由で江別市役所に入職した。

市役所に就職して3年目の昭和41（1966）年には、4年制大学の通信制の3年次に編入した。夏期スクーリングが各年40日間あったため休暇の取得に苦勞した。大学は東京都にあったので、上京し、福生市にて母の弟が営む青果店の2階に下宿した。翌年には、札幌から東京に転勤になった友人の家に家賃半額を支払って同居させてもらった。忙しい中で、九州・静岡・茨城出身の友人たちとの麻雀はとても良い思い出になった。

昭和43（1968）年4月に、当時交際していた女性との結婚後の住まいとして、江別市大麻地区にある道営住宅⁽¹¹⁾に申し込んだ。結婚予定であれば成年者2名以上の各種証明書類、前年度の給与所得源泉徴収票などを提出した。無事入居に当選し、4月末からまず一人で大麻団地に住むこととなった。新居は4.5畳2部屋と、6畳のキッチン兼居間の2DKであった。水洗トイレで下水道は完備されており、風呂はなかった。家賃は月額4,400円だった。

新居は用意できたものの、結婚式の日程と会場の調整がなかなかつかず、数か月経ってしまった。最終的に

(11) 結婚直前から住み始めた大麻団地は、平坦で地盤が良く、札幌市中心部から15kmあまりと好条件の地域である。このころに既に人口が爆発的に増加していた札幌市とその周辺の住宅不足解消と同時に、都市施設の完備した住宅地を札幌市周辺に計画的に造成するという目的のもと、大麻団地の開発計画は昭和38（1963）年に全体像が明らかにされ、昭和39（1964）年に起工した（『新江別市史』pp.557-558）。

は、9月9日の江別神社の例祭の日に結婚式を行った。当時江別神社の例祭日は、役場はいわゆる「半ドン」で、午後は休みであった。急遽式の日程を決め、会場は当時新築間もない江別農協の2階の大広間を予約した。結婚式は会費制で、参加者は124名、祝賀会の会費は1人当たり1,200円だった。仲人は、当時は所属先の課長職に依頼するのが一般的だったが、親しくしていた係長に依頼した。結婚式が終わった後、洞爺湖へと新婚旅行に出かけた。

結婚後昭和44（1969）年には長男、昭和47（1972）年には次男、昭和51（1976）年には三男が生まれ、五人家族となった。また、昭和48（1973）年には一軒家を江別市内に新築して道営住宅から引っ越し、平成9（1997）年には2件目の家を新築し、引っ越した。いずれも江別市内であった。この間、江別市役所での勤務を続けながら、少年野球の指導や水泳の指導を十数年続けた。また、三男が高校生になったころには、旅行に出かけるようになった。子どものころから歴史に興味があったこともあり、妻や自分の先祖をたどるための資料探しにフェリーで新潟県に何度も通った。そして61歳になる年の平成17（2005）年3月31日に定年退職を迎えた。

(6) 定年退職以降（平成17～現在）

平成17（2005）年の4月からは、退職直前に配属されていた江別市郷土資料館に、嘱託職員として平成19（2007）年までの2年間勤務した。嘱託期間が終了した後、ボランティアとして4年2か月の間、月1回のペースで歴史講座の講師も務めた。

この間、自分や妻の先祖に関する資料探しも継続しており、樺太への興味も持ち続けていた。平成21（2009）年には、自分の出生地である樺太恵須取の出身者の会「北海道恵須取会」の存在を知り、入会した。当時の副会長B氏から、樺太の各種地図や樺太に関する資料の所在などを教えてもらい、自分でも自身の両親などに関係する情報を樺太の地図に書き込んでいく作業を進めた。

恵須取会への入会后、事務局を担うこととなり毎年の総会・懇親会の開催や、平成23（2011）年から27（2015）年にかけて5回の樺太訪問を実現させた。バスや車の窓から見る樺太は「なんもないところ」だった。平成24（2012）年からは、歩いてみないとわからない、ということでバスや車を待機させ、1時間ほどか

けてこちらが王子製紙、あちらが恵須取市街地…と距離感や場所を確認した。それを続けるうちに、「樺太にはまり込んで」いき、とうとう3回目にはどこに何があるかを紹介する案内役まで務めるようになった。案内役をするようになったのは、2回目の訪問の後、副会長のB氏が亡くなり、その遺族に「お父さんは俺のことは（A氏に）引き継いでいる」と伝えていたことも一因であった。B氏の希望もあり、3回目の訪問の時にB氏の眼鏡や入れ歯を本人の代わりと思って持参し鎮魂碑の脇に埋め、さらに遺骨を海に撒いて散骨した。

このような経験を積みつつ、樺太関係資料を探す過程で、一般社団法人全国樺太連盟の事務局にも出入りするようになった。そこで、ちょうど事務を担ってくれる人を探しているということから、平成27（2015）年5月15日から令和3（2021）年4月30日まで勤務した。

両会での活動により、自分よりも一回り以上の年齢で、樺太での生活経験を記憶している樺太生まれの先輩方と出会った。会合があるとその人たちの話す樺太での体験についても初めて聞くことが多く、また話の中で「ユウエンコ（有縁故）」や「ムエンコ（無縁故）」⁽¹²⁾といった単語が出てきてもよくわからず、最初は話についていけなかった。また、どこに何があったかなどはこれまでの調査の過程で理解し、伝えることもできるが、実際の戦争の体験や樺太での生活体験については、体験した方々に話を聞いたり、冊子等で知ようになった。知識を得るうちに「私も少し樺太の地名、風土、歴史が語れるようになり、ここで会員の一人として認めてもらえる」と徐々に感じるようになった。

A氏は、令和6（2024）年4月に、これまで調査し収集してきた資料を基に、自分史を発行した。自分史発行の理由について、下記の通り記している。

故郷（樺太）が異国となり、自分の歩んだ道が少しでも「子供や孫」に知ってほしかった。

両親の故郷は新潟県（越後）。また妻方祖父母も越後出身で明治26年来道、北越植民社にも関連し明治27年幌向原野（現：江別太）への移住は単独移民開墾の先駆けでもあり50町歩開墾した。この妻の地に住宅を建てることで三人の子供を育てた。何時の日か子供、孫たちが「樺太（引揚）、蝦夷地における江別村、江別太の歴史」をひも解き次の時代に生かしてほしい。

また、色々な写真、メモ、スクラップ、が今となり人生を辿るうえで私の歩みが表現でき「雑な文面」でも読

(12) 当時の政府は、樺太も含めた外地から日本本土へと引揚げを余儀なくされた引揚者について、それまでの生活の基盤が外地にあったこと、それらが太平洋戦争の終結に伴い失われてしまったことを踏まえ、縁故先（血縁や姻戚などの関係によるつながりなど）の有無によって、異なる応急的な援護（支援）を行った（昭和20年8月30日に次官会議にて決定した「外地（樺太を含む）及び外国在留邦人引揚者応急措置要綱」による）。本土への上陸後は一時的に要する共同的な宿泊施設や食料、医療等は等しく受けられたものの、有縁故者はその後縁故先に移動するための資金が用意され、無縁故者は宿舍施設が供与された。

んでももらえればと思い作成した（※A氏との協議の上一部修正、人名は伏せた）。

3 おわりに

ここまで、ある樺太引揚者の引揚後の生活について、聞き取りや本人の自分史等をもとに記述した。不十分な点もあるが、それらについてはこれから調査を重ね、改めて報告したい。そのような状況ではあるが、若干の考察を次に記す。A氏の両親とも樺太で生まれ育ったことも影響しているのか、北海道や本州で暮らす父親の兄弟や母親の実家を頼っての移住も一時的にみられるものの、最終的には恵須取で勤務していた会社の知り合いを伝手として再びの渡道、現在の江別市への定住へとつながっている。生活を立て直す際に血縁も重要であるが、社縁（社宅に住んでいたため地縁でもある）の果たした役割は大きかったことがうかがえる。

また、家計を担っていた大人はもとより、それについて変化する暮らしに適応してきた子どもたちの様子がどのようなものであったか、その一端がうかがえた。

当然ながら、A氏本人は幼かったために樺太での生活及び函館に引揚げる際の記憶はないが歴史や地理に興味があったことも影響し、徐々に自分の出生地であり、家族の過ごした樺太に興味を抱くようになった。樺太の地図や書籍、自身に関係する人の戸籍などを調査し自分のルーツを探るうちに、樺太恵須取からの引揚者団体とのつきあいが生まれ、現地訪問の際には案内役まで務めるようになり、今日までの20年余り樺太に関する知識を蓄積し続けている。

ただし、本人が自覚しているように、引揚げ時の年齢によって、実体験として覚えていることとそうでないこ

とが当然ある。北海道恵須取会や全国樺太連盟で出会った人々の間に「自分も入れる」と思えるようになった、というA氏の感覚は、ひとことで「樺太引揚者」といっても、世代間にギャップがあることという当たり前のことを改めて感じさせる。記憶している年代や経験の差があるとしても、引揚者である彼自身が樺太で暮らした人々の記憶と生活経験を内面化し、各組織の運営に携わってきたことによって、主たる会員の高齢化が著しい樺太引揚者の各団体の活動がここまで維持されてきたともいえる。

当時子どもであったA氏でさえ、本調査を実施した令和6（2024）年に80歳を迎えている。これまで再三指摘されてきたことだが、関係者へのかつての樺太や引揚後の生活の記憶の聞き取りは急務である。今回のように、聞き取った内容は記述し、公開していくことで記憶継承の一助とし、今後も関係者の皆様にご協力いただきながら、本事業を継続していきたい。

参考文献

- 石垣福雄 1991『増補改訂版 北海道の方言』北海道新聞社。
江別市総務部編 2015『新江別市史 本編』江別市。
尾曲香織 2021「樺太引揚後の生活とその位置づけ—ある女性の回想から—」『北海道の文化』一般財団法人北海道文化財保護協会。
洪郁如・田原開起 2016「朝鮮引揚者のライフ・ヒストリー—成原明の植民地・引揚げ・戦後」『人文・自然研究』10。
島村恭則編 2013『引揚者の戦後』新曜社。
上富良野町郷土をさぐる会編 1987『郷土を探る』6号。
上富良野町郷土をさぐる会編 1988『郷土を探る』7号。
上富良野町郷土をさぐる会編 1990『郷土を探る』8号。
江別市総務部編 1995『えべつ昭和史』江別市。
函館市史編さん室編 2022『函館市史』通説編第4巻・函館市。

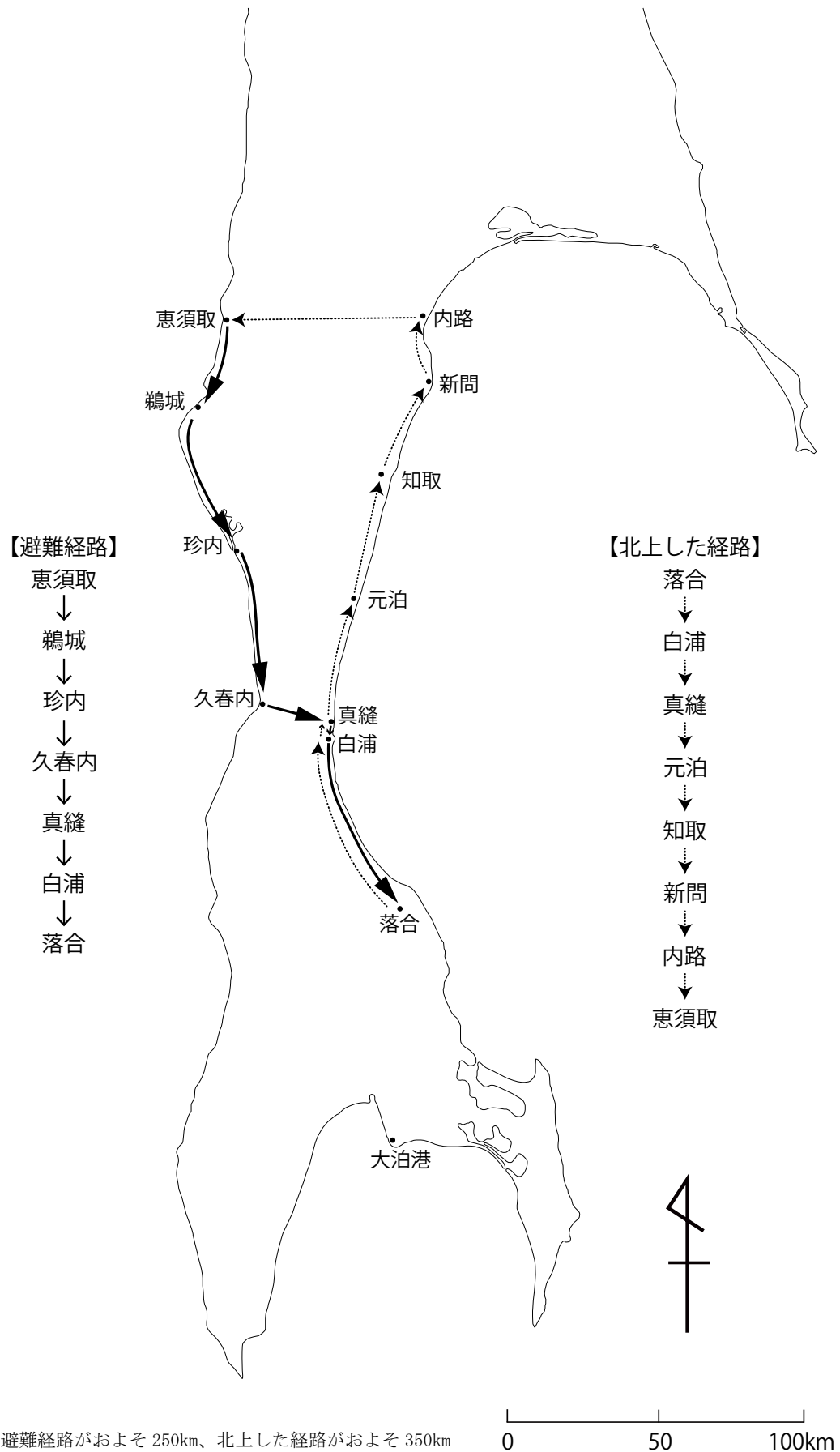


図1 昭和20（1945）年8月10日以降の移動先位置図

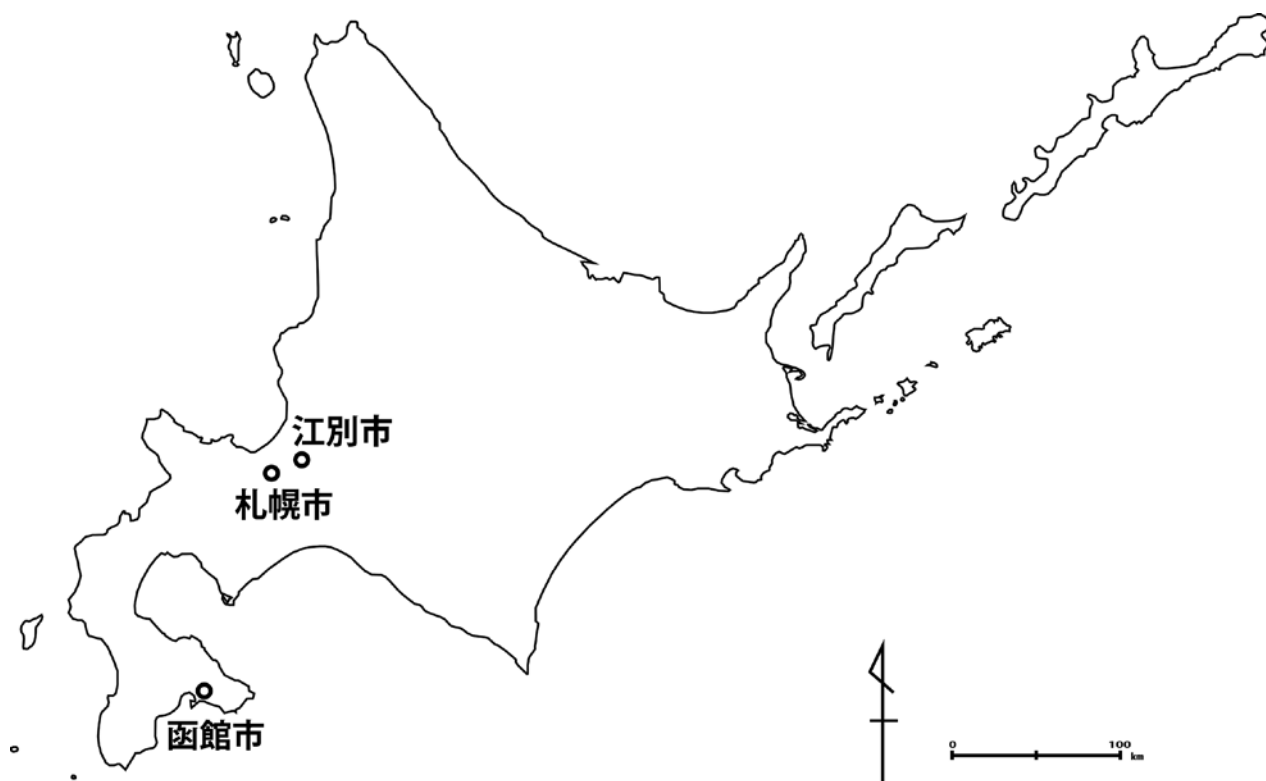


図2 A家の引揚げ後の道内関係先位置図

RESEARCH REPORT

The Post-Repatriation Life of a Sakhalin Native: Reflections on Childhood Repatriation and Personal Experiences

OMAGARI Kaori and ISHIKO Tomoyasu

This study documents the life of a man born in Sakhalin, focusing on his post-repatriation experiences and his life up to the present. The subject of this study was repatriated from Sakhalin to Hokkaido in 1948 at the age of four. Following repatriation, his family relied on relatives of his parents as he moved around various locations in Hokkaido and Honshu. Eventually, he settled in the outskirts of Sapporo, where he marked significant personal milestones, such as further education, employment, and marriage.

After starting his career, he developed interests in history and geography, which led him to study Sakhalin and investigate his own roots. During this

process, he joined an association of fellow Sakhalin natives, and also took the opportunity to ask his mother about their experiences during repatriation, which he could barely remember. Reflecting on his own life, he compiled a personal history.

Past research on repatriation from Sakhalin has primarily focused on events that occurred during the repatriation process itself. However, to understand the realities of life after repatriation and the long-term effects of the experience, it will be essential to collect case studies such as this. Future research must incorporate detailed analyses that consider the broader social context.

